

第19話 四條畷の戦

楠木正行が四條畷で戦死すると、賊軍が吉野の皇居をお犯し奉ろうとする。  
後村上天皇は難を避けて賀名生に遷りたまう。

近畿の官軍

さて、吉野に帰った北畠親房は、いよいよ朝廷の柱石となって天皇を輔け奉り、四條隆資らと共に努めて身方の勢力を養い、機会を待って京都の回復を図ろうとした。曩に彼の子の顕家が和泉の石津に戦死し、顕信が男山に敗れてから、近畿の官軍は大いに衰えてしまったのだが、彼が常陸から帰って3年後の正平元年の秋ごろになると、漸くまた勢いが盛んになって来た。楠木正成の子の正行が成長して、その一族と共に官軍の中心となったからです。

楠木正行

楠木正行が延元元年5月、桜井駅で父と別れて泣く泣く河内に帰った事は前に述べたが、その後間もなく尊氏から送られた父の首が故郷に届いた。

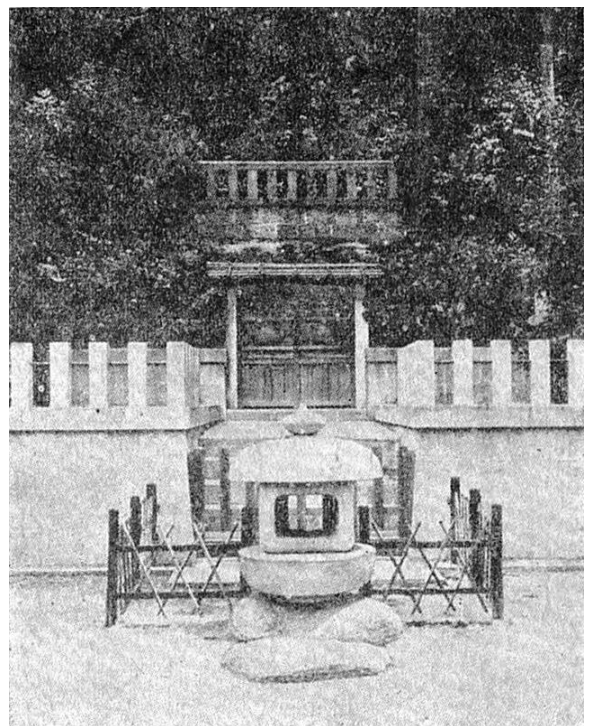
予ねてこうなることは思い設けていたものの、あまりにも変わり果てた父の首を見ると、彼は今更の如くに悲しくなり、流れる涙を袖に抑えながら佛間の方に行った。

正行の母

母は悲嘆の中にも怪しく思って、妻戸の方から行って見ると、父が形見に留めた菊水の刀を右の手に抜き持って、袴の腰をぐっと押しさげ、今や自害をしようとしている。母は走り寄って正行の小腕に取り付き、涙を流していった。

「梅檀(訳注：白檀は二葉に発芽時から香氣がある)は二葉より芳しという事がある。そなたも幼いとはいえず、父の子ならば、これほどの道理に迷うはずはありますまい、子供心にもよくよく考えて御覧なさい。おとうさまが兵庫に向われた時に、そなたを桜井駅からお帰しなされたのは、全く跡を吊って貰おうためではありません。腹を切れとてお残しなされたのでもありません。自分はたとえ運命が尽きても、戦場に命を失うとも、そなたはわれになり代わって、今一度軍を起こし、御敵を滅ぼして、君の御心を安んじ奉れとお言いなされたのではありませんか。その御遺言をつぶさに聞いて、この母にも語った者が、いつの間に忘れたのです？ そんな事では父の名をも辱かしめ、君の御用に立つ事も出来ません」

と、泣く泣く言っかけて聞かせて、抜いた刀を奪い取ると、正行も泣き倒れて、母と共に歎いたのです。



大阪 楠公(楠木正成)の首塚  
(河内の観心寺の中に在る)

## 第19話 四條畷の戦

さすがは大忠臣正成の妻です。正行をしてよく忠臣孝子の美名を後世に残させたのも一つはこの母の力であったといえます。

その後、正行も父の遺言と母の教訓とを決して忘れず、日々の遊びにも朝敵の首を取る真似をしたりして、ひたすら忠義の道に心を向けた。

### 藤井寺の戦

こうして後村上天皇が御位に即かれて後は、楠木正行は親しく吉野に参って皇居をお守り申ししていたが、その後、北畠親房らと共に京都の恢復を図り、正平2年8月、先づ兵を紀伊に出してその地の賊軍を攻めた。京都ではこれを聞いて大いに驚き、細川顕氏を大将として正行を討たせたが、正行は軍を紀伊から返して、9月17日、河内の藤井寺の附近に顕氏の軍と大いに戦ってこれを破った。顕氏は敗れて天王寺に退いた。

この知らせが京都に伝わると、足利尊氏はいよいよ驚き、更に山名時氏を大将として赴き援けしめた。時氏は陣を住吉に構えて、天王寺の顕氏の軍と連絡を取って、一挙に正行を討とうとした。その軍勢は6,000騎で、正行の軍は2,000余騎しかない。

### 瓜生野の戦

3倍もの敵に対して、まどもの軍をしたのでは勝味はないので、正行はこちらから先づ進んで敵を追い散らそうと、11月26日の明け方、俄かに起って瓜生野の北から敵軍に迫った。瓜生野は今の大阪市の南方、約8kmの地で、大和川の北岸です。敵は不意を撃たれてあわてはしたが、もとより大勢の事ですから、忽ち軍を分けてこれを防いだ。けれども、こちらは、数こそ少ないが、いづれも忠義に鍛えた勇士ですから、1歩も引かずに進んで奮戦したので、ついに敵は総崩れになって逃げた。

敵の大将の山名時氏でさえ、身に7ヶ所の切創射疵を受けたというのを見ても、いかに激戦であったかが分かります。

### 正行、敵兵を救う

この時、先を争って逃げた賊兵共は、渡邊の橋から堰落とされて、流れた者が500余人もあつたが、正行は部下に命じて悉くこれを救い上げさせた。しかし、時は霜月の26日で、今の太陽暦では、ほぼ一月の初めに当るので、いうまでもなく寒い冬の真っ最中です。

水からこそは救われたが、肉は破れ、膚には氷が張って、逆も生きられそうにもなかったの

を、正行は着物を着替えさせたり、薬を与えて疵を癒させたりして、十分に手当てをさせた上で、4, 5



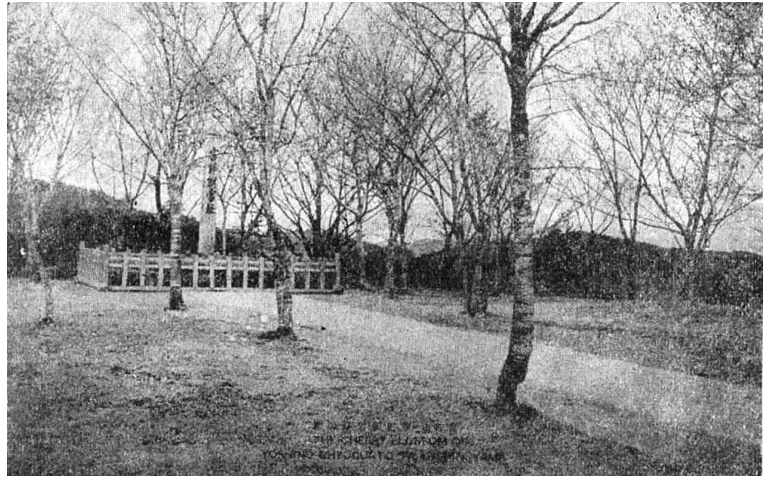
くすのきまさつら  
楠木正行



日の後に、馬に乗る者には馬を与え、鎧を失くした者には鎧を着せてかえしてやった。何という正行は優しい人であつたらう！ 哀れを見ては敵をも救わずにはいられなかったのです。正行のこの恩に感じて、彼らは間もなく正行の部下に属して、後の四條畷の合戦に悉く討ち死にしました。

敵の大軍来る

一方、足利尊氏は、山名時氏も敗北したと聞いて大いにあわて、今は寸時も猶予しているところではないと、諸国、中国、東山、東海、20余ヶ国の兵を發して、一挙に河内の官軍の根拠地を覆えそうとした。その総勢は80,000余騎で、大将は高師直、同じく師泰の兄弟でした。



よしののちやうてい みやあと きんりんのおうじあと  
吉野朝廷の宮址 (吉野の金輪王寺址)

正平2年12月18日、彼らは京都を發して、その28日に師直は男山に陣し、師泰は淀に陣した。



さいご いとま くすのきまさつら  
吉野 最後のお暇を申し上げる楠木正行

## 第19話 四條畷の戦

まさつら さんだい  
正行の参内

まさつら さいご しょうぶ けつ とき  
楠木正行はこれを聞いて、いよいよ最後の勝負を決する時が来たと考えた。

まさとき いちぞくろうとう よしの こうきよ まい しじょうたかすけ とりつ  
12月27日、彼は弟正時以下の一族郎等143人と共に吉野の皇居に参り、中納言四條隆資のお取次ぎ  
もう あ  
で申し上げた。

まさしげ わか すで まさつら まさとき ようや そうねん たつ このたび ぜんりょく つく  
「父正成に別れまして既に10余年を経て、正行も正時も漸く壮年に達しました。今度、全力を尽  
かつせん ぼうふ ゆいごん めんぼく か  
して合戦をいたしませんと、亡父の申した遺言にもたがい、また、武士としての面目に欠けるかとぞんじ  
ひと み も やまい かか わかじ いた きみ ため ふちゅう しん  
ます。人の身のはかなさで、若し病に罹って若死にでも致しましては、君の御為には不忠の臣となり、  
ちち ふこう こ もろなお もろやす しんめい つく  
父のためには不幸の子となるのでありますから、今度、師直、師泰を相手に、身命を尽して戦い、彼らの  
まさつら まさとき しょうぶ けつ  
首を取るか、正行、正時の首を彼らに取られるか、その二つの中に勝負を決するつもりであります。  
つ きみ りゅうがん はいしたてまつ さんだい つかまつ  
就いてはこの世にて今一度、君の龍顔を押し奉りたくて参内 仕りました」

なみだ よろい そで お たかすけ  
と申し上げると共に、涙を鎧の袖にはらはらと落としたので、お取次ぎの隆資も、まだ天皇に申し上げ  
さき ま なおし そで む  
ない先に、先づ直衣の袖を濡らした。

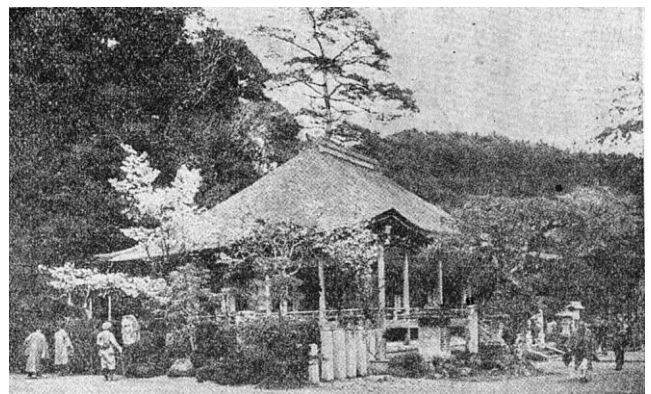
ただ なんでん みす たか ま おんかお こと うるわ しょうしちどう みわた まさつら  
天皇は直ちに南殿の御簾を高く捲かせて、御顔も殊に麗しく将士一同をお見渡しになり、正行を  
ちか め  
近くに召されて、

あいだ き お うれ おも  
「この間の2度の戦いに勝って、敵軍に気を落とさせたのは、かえすがえすも嬉しく思うところである  
こと さだ なんぎ すず しりぞ  
ぞ。今度の敵は殊に大軍であるという事だから、定めて難儀であろうが、進むべき時には進み、退く  
われ なんじ ここう つつし いのち まつと  
べきには退くようにせよ。朕は汝を股肱としている。謹んで命を全うせよ」

おお まさつら あたま ち つ かんるい むせ こた もう あ  
と仰せられたので、正行は頭を地に著けて、感涙に咽んでいたが、とかくのお答えは申し上げず、ただ  
さいご さんだい おもいさだ たいしゅつ  
これを最後の参内と思定めて退出した。

にょいりんどう  
如意輪堂

まさつら まさとき わだのしんばち しんべえ  
正行、正時、和田新發意、その弟の新兵衛以下、  
いくさ ひとあし いっしょ うちじに  
今度の軍に一足も引かず、一緒に討死しようとする約束  
ごだいご みささぎ まい  
したもの143人、それより後醍醐天皇の御陵に参っ  
いくさ なんぎ うちじにつかまつ いとま  
て、今度の軍が難儀ならば討死 仕りますとお暇  
にょいりんどう かべいた せいめい か  
を申し上げ、如意輪堂の壁板に、おのおのの姓名を書  
つら  
き連ねて、その終わりに、



吉野 にょいりんであら  
如意輪寺

かへ か おも あづさゆみ かず な  
返らじと予ねて思へば梓弓 なき数にいる名をもとどむる

しゅ か とど びん け き ぶつでん な い むか  
と、一首の歌を書き留め、おのおのの鬢の毛を切って仏殿に投げ入れ、その日に吉野を立てて敵陣に向った。

こうのもろやす もろなお  
明ければ正平3年正月2日、高師泰は20,000余騎を率いて、淀を発して天王寺に向かい、師直の軍  
しじょうなわて あた さらら じん  
は60,000余騎で河内に入って、四條畷 — 今の大阪市の東北およそ12km — の南に当る佐良良に陣し  
さら ほんきよ いっきよ おとしい かれ さくせん  
た。更に進んで、河内の官軍の本拠を一挙に陥れようというのが彼の作戦だったのです。



## 第19話 四條畷の戦

### しじょうなわて いくさ 四條畷の戦

正月5日、**正行**は3,000余騎を率いて進んでこれを襲った。敵に比べて身方は1/20という小勢でもあったが、もとより必死の勢いで向ったのですから、その日の未明に、四條畷で敵の先陣と衝突してから、行き逢うところの敵という敵は皆破られて、引き退く。**正行**が目指すは師直と、ただその本陣に向って、まっしぐらに突進したので、身方の後陣は敵に追い返されて遥かに隔たったが、それにも頓着せずに、僅かに200に足らぬ手兵を率いてますます進んだ。

その盛んな勢いに恐れて、**師直**の本陣の7,000余騎の兵らまでが、さっと道を開いて逃げ出したので、あわや**師直**は、**正行**の手にかかってここに討ち取られるよと見えたが、この時、**上山高元**という**師直**の家来が、**師直**の鎧を着て、忽ち**師直**の前に馳せ塞がり、大音声を揚げて、「音に聞こえた**高師直**これに在り」と名乗って討たれている間に、**師直**は遥かに遠くに逃げた。

### もろなお にせくび 師直の贖首

**正行**は**高元**の首を取って大いに喜び、多年の望みを今日こそ遂げた、これを見よや人々とて、その首を空中に投げ上げては請け取り、投げ上げては請け取って喜んだが、間もなく、それが**高元**の首だと分かる、大いに怒って、地に投げ棄てた。しかし、直ぐにまた思い返して、わが君の御ためには憎むべき朝敵だが、身代わりになって死んだ**勇気**は感心だ、外の首と同様にはすべきではないとして、着ている着物の片袖を引切って、この首を包んで岸の上に置いた。

### まさつら うちじ 正行の討死

それにしても、**師直**はどこにいるかと遥かに北の方を見ると、輪違いの紋のついた一流れの旗の下に、7~80騎の兵に守られている。今度こそは遁すなど、**正行**および**正時**は生き残った50余人の部下と共に、又もや進んで**師直**に迫ったが、すでに6~7時間も戦って、身には多くの矢創を受けているので、思うように働けず、そのうちに、部下の兵らもだんだん討ち死して、残った者も1人として3,4ヶ所の傷を受けない者はなかった。

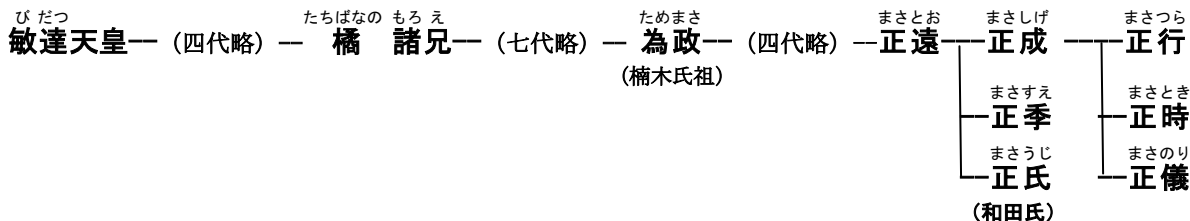
「今はこれまでぞ、敵の手にかかるな」とて、**正行**は**正時**と刺し違え、北枕に倒れると、残りの兵の32人も、思い思いに腹を切って重なり伏した。時に**楠木正行**は23才でした。

墓はその戦死の場所に設けられて、今も世に珍しい大きな樟の下に石碑が立っている。後、**明治天皇**は**正行**に従二位を贈られ、**大正天皇**は**正時**に**正四位**を贈られた。



大阪 四條畷市 四條畷神社

墓から東に距つこと1kmの地に在る別格官幣社**四條畷神社**は、即ち**正行**を祀った社であります。



さて、<sup>まさつら</sup>正行が戦死すると、今まで逃げまわって  
いた<sup>もろなお</sup>師直は、俄かに<sup>にわ</sup>軍を<sup>かえ</sup>旋して<sup>ついで</sup>追撃に移った。彼  
は正月15日に<sup>やまと</sup>大和に<sup>うちいり</sup>打入り、<sup>いた</sup>到る<sup>ところ</sup>処の<sup>みんな</sup>民家に火を  
放ってこれを<sup>こうきよ</sup>焼きながら<sup>おか</sup>進んで、<sup>おか</sup>吉野の<sup>お</sup>皇居を犯そ  
うとした。



奈良 五條市 西吉野町 <sup>あのう こうきよあと</sup> 賀名生の皇居址

<sup>あのう せんこう</sup> 賀名生に遷幸

吉野の朝廷では、<sup>まさつら せんし ふか</sup>正行の戦死を深く<sup>いた</sup>悼まれたが、  
今また<sup>ぞくぐん</sup>賊軍が進んで<sup>すす</sup>来るのを<sup>く</sup>聞かされると、正月25

日に、<sup>ごむらかみ</sup>後村上天皇は三種の<sup>さんしゆ</sup>神器を<sup>じんぎ</sup>奉じて<sup>ほう</sup>行宮を出でられ、<sup>あんぐう</sup>朝廷の役人らをも<sup>ことごと</sup>悉く<sup>つ</sup>お連れになって、<sup>けわ</sup>険し  
い<sup>やまさか</sup>山坂を<sup>こ</sup>躰え、<sup>およ</sup>吉野から<sup>きょう</sup>西南方<sup>なん</sup>凡そ20km<sup>さ</sup>強の<sup>あのう</sup>ところにある<sup>さんちゆう</sup>賀名生の<sup>なか</sup>山中に<sup>あなふ</sup>難をお<sup>か</sup>避けになった。こ  
の地は<sup>たにま</sup>吉野川の<sup>あた</sup>南方の<sup>あ</sup>谷間に<sup>あなふ</sup>当って、<sup>か</sup>紀伊に近い<sup>あなふ</sup>所に<sup>か</sup>在る。もとは、「穴生」と<sup>あなふ</sup>書いていたが、<sup>か</sup>天皇のご  
<sup>せんこう</sup>遷幸後、「<sup>あのう</sup>賀名生」と<sup>あらた</sup>改めたのです。

その3日後の28日、<sup>もろなお</sup>師直は30,000余騎を率いて<sup>ついで</sup>遂に<sup>せめよ</sup>吉野に<sup>とき</sup>攻寄せた。3度までも<sup>こえ</sup>関の<sup>あ</sup>聲を揚げ  
たけれども、<sup>すで</sup>既に<sup>だれ</sup>誰もいないので、<sup>こた</sup>答える<sup>おと</sup>音もない。さらば<sup>やきはら</sup>焼払えとて、<sup>こうきよなら</sup>皇居並びに<sup>しよやくにん</sup>諸役人の<sup>すまい</sup>住居に  
火を<sup>か</sup>懸けさせた。折<sup>おり</sup>からの<sup>やまかぜ</sup>山風に<sup>ふ</sup>吹き<sup>あお</sup>煽られて、<sup>ひ</sup>火の手は<sup>て</sup>忽ち<sup>たちま</sup>八方に<sup>はっほう</sup>まわり、<sup>ゆうめい</sup>有名な<sup>ざおうどう</sup>蔵王堂を始めと  
して<sup>や</sup>多くの<sup>お</sup>寺々なども<sup>お</sup>焼け<sup>お</sup>落ちた。

<sup>もろなお</sup>師直は更に<sup>さら</sup>軍を<sup>ぐん</sup>転じて、<sup>あのう</sup>賀名生の<sup>あんぐう</sup>行宮をも<sup>おか</sup>犯したが、<sup>かえ</sup>却って<sup>う</sup>官軍に<sup>やぶ</sup>さんざんと<sup>う</sup>打ち<sup>やぶ</sup>破られて、2月  
12日、<sup>ついで</sup>遂に<sup>しりぞ</sup>奈良に<sup>やまと</sup>退き、<sup>きょうと</sup>大和の<sup>ふたた</sup>兇徒は<sup>そむ</sup>再び<sup>ちか</sup>叛かない事を<sup>か</sup>誓ったなどと<sup>か</sup>勝手に<sup>いいふ</sup>言触らしながら、<sup>か</sup>やが  
て<sup>か</sup>京都に<sup>か</sup>帰って<sup>か</sup>行った。

<sup>くすのきまさのり</sup>楠木正儀

しかし、<sup>もろなお</sup>高師直の<sup>もろやす</sup>弟の<sup>かわち</sup>師泰は、その<sup>とど</sup>後<sup>ひさ</sup>も<sup>しじょうなわて</sup>な<sup>しじょうなわて</sup>お<sup>しじょうなわて</sup>河内に<sup>しじょうなわて</sup>留まって、<sup>しじょうなわて</sup>久しく<sup>しじょうなわて</sup>官軍と<sup>しじょうなわて</sup>戦っていた。四條畷の  
戦いの<sup>いづみ</sup>後に、<sup>さかいうら</sup>彼は<sup>はつ</sup>和泉の<sup>とうじょう</sup>堺浦を<sup>くつが</sup>発して<sup>くつが</sup>河内に入り、<sup>くつが</sup>楠木氏の<sup>くつが</sup>本拠である<sup>くつが</sup>東條の<sup>くつが</sup>城を一<sup>くつが</sup>挙に<sup>くつが</sup>覆え<sup>くつが</sup>そうと  
したのだが、<sup>まさつら</sup>正行の<sup>まさのり</sup>弟の<sup>まさのり</sup>正儀が<sup>まさのり</sup>よく<sup>まさのり</sup>守ったので、<sup>まさのり</sup>遂に<sup>まさのり</sup>抜く<sup>まさのり</sup>ことが<sup>まさのり</sup>出来ず、<sup>まさのり</sup>互いに<sup>まさのり</sup>勝ったり、<sup>まさのり</sup>負けたりして  
いるうちに、<sup>およ</sup>1年半以上も<sup>およ</sup>経って、<sup>およ</sup>翌正平4年8月に<sup>およ</sup>まで<sup>およ</sup>及んだ。その時、<sup>もろなお</sup>京都では、<sup>あしかが</sup>兄の<sup>あしかが</sup>高師直と<sup>あしかが</sup>足利  
<sup>ただよし</sup>直義とが<sup>ふ</sup>不和になって、<sup>うわさ</sup>2人が<sup>うわさ</sup>戦おうとして<sup>うわさ</sup>いる<sup>うわさ</sup>噂まで<sup>うわさ</sup>聞こえたので、<sup>もろやす</sup>師泰は<sup>はたけ</sup>急に<sup>はたけ</sup>昌山<sup>はたけ</sup>国清を<sup>はたけ</sup>紀伊から  
<sup>まね</sup>招いて<sup>まさのり</sup>正儀の<sup>あ</sup>軍に<sup>あ</sup>当たらせ、<sup>あ</sup>自分は<sup>あ</sup>あわて<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>京都に<sup>あ</sup>帰った。

( 第19話 四條畷の戦 終わり。 次は前頁に戻り、 第20話 足利氏の内訌 )